

# ラフカディオ・ハーンと猫

—ネオ・ロマン派から世紀末へ—

一九〇一年七月、ハーンは恒例のように長男の雄と焼津に滞在して、その夏を楽しんだ。後から加わった書生の玉木光栄と共に、午前中は一雄に勉強をさせ、午後は泳ぎを教えて、思うさま遊んでいる様子は、東京の妻セツに宛てた日本語の手紙にうかがえる。

小サイママ。

今日ハ少しオ日サンガアタリマシタ。一雄ハ海デ水雷艇遊ビラシマシタ。一雄ハ毎日泳ギガ上手ニナリマス。

昨日運動シマシタ。アノ猫ニ小サイ手鞠ト小サイ小サイ鈴ヲ買ツテヤリマシタ。今焼津の石屋ガ地藏ノ相ヲカイテ私ニ見セテ居マス。アノ仏像ノ上ニ『小泉一雄カラ』ト、ホラセマセウ。焼津ノ人ハ大喜ビスルデセウ。

ココニハ蚤ガ沢山居テ刺シマス。アナタノ来ル時、蚤取りノ薬ヲ少し持ツテ来ルヤウ願ヒマス。然シアノ小猫ノオ蔭デ蚤ノ事モ忘レマス。ソレ程ヲカシイ猫デス。私ハアノ小サイ烏猫ヲ『ヒノコ』ト呼ビマス。

パパカラ

巖、清二接吻

焼津

七月十二日<sup>(1)</sup>

水雷艇遊びとは泳いでいる父親の腹を潜って突く遊びであり、運動とは長い散歩をいう。散歩の途中、崩れた浪切り地藏を見て、寄進を思い立ち、また蚤の中にも忘れて猫と興じる、仕事を忘れたハーンのバカンスである。この黒猫を飼うことになった経緯は同行した玉木から次のように伝えられている。

明治三十五年夏、焼津でハーンは、飼い主が捨てに行く途中の黒猫を買取つて帰った。そして玉木青年に「こんな黒猫は日本では何といますか」と問うた。玉木氏が「からす猫といひます」と答えると、これを聞いたハーンは「からす猫」と言つては笑い、また「からす猫」と言つては笑い、おかしくてたまらぬ風で、なかなか笑いがとまらなかつた。この猫は後に「ヒノコ」という名がつけられた。<sup>(2)</sup>

この笑いの秘密は梶谷氏が指摘されているように、ワトキンに宛て

銭 本 健 二

た手紙で、自分のことを「鳥」と名乗っていたことによるが、「黒猫 (The Black Cat)」も「大鴉 (The Raven)」も彼が尊敬する E・A・ポーの代表作であり、その複合した呼び名が笑いを誘ったのである。この猫を「ヒノコ (shark)」と名づけた由来は、七月二十五日のセツ宛の手紙で報告されている。

一雄ノモツテ居ル小舟ニ名前ヲツケマシタ。ヒノコ丸ト呼びマス。オ咲サンガ其ノ舟ニ小サイ旗ヲ立テマシタ。アノ小サイ鳥猫ニモ名前ヲツケマシタ。ヒノコト呼びマス。小サイ眼ガ火ノ子ノヤウデスカラ。

焼津ノパパカラ

可愛イママニ。<sup>(3)</sup>

大谷正信は「ヒノコ」の名の由来をその雷光のようなすばやさがあると書いているが、誤伝であろう。小泉一雄の思い出によると次のようである。

二つの眼が夕闇の中で異様に焚いてまるで火の子のようであるし、その背を暗い所で撫でるとパチパチと微かな音がして小さな青い火の子(電火)が飛び出しますので父はこれを火の子と名付けました。<sup>(5)</sup>

黒猫の眼が闇の中で輝く様を形容したものが、また E・A・ポーの「大鴉」の次の一句もハーンの脳裏にあったと考えられる。

... the fowl whose fiery eyes now burned into my bosom's core;

それとも後に言及することになるが、ワーズワスの猫の詩の中の一節によるのであろうか。

What intenseness of desire  
In her upward eye of fire.

ロマン派文学から世紀末芸術に到る猫の主題は、日本でも漱石山房の集いで語られた「ネオロマンチズム」ならぬ「ネコロマンチズム」の跡を漱石から百間、朔太郎へと辿ることができよう。

文芸上の自然主義の後に唱へられた新浪漫主義、ネオロマンチズムは、塊太利のフーゴー・フォン・ホフマンシュタールや白耳義のメーテルリンク等によって若かった私共に随分影響を与へた。漱石先生のまだお達者な当時で、木曜日の晩の漱石山房の席上、ネオロマンチズムがしばしばみんなの間に言議せられた。鈴木三重吉さんは先生の「猫」に当てこすって、ネオロマンチズムをいつもネコロマンチズムと云った。<sup>(6)</sup>

\* \* \*

ハーンは帝国大学に着任以来、一貫して英文学史の講義を行っているが、その講義録の第七章「ジョンソンの時代の詩」の中で、古典主義的教養の中からロマン主義文学が胚胎する様子を図式化して説明している。そしてその具体的な例をトマス・グレイの詩である「金魚鉢で溺死したお気に入りの猫の死に寄せるオード (Ode on the Death of a Favorite Cat Drowned in a Tub of Gold Fishes)」に求めている。グレイはこの詩で愛猫の死をポー流の古典主義的技法を駆使しながら描くことで、古典主義の詩法を皮肉り、同時にその技法によって雌猫セリマの溺死に対する悲しみを耐えて、軽ろやかな「社交詩」にしたことに成功しているという。「社交詩」の掟では、ごくつまらない悲しみや出来事をごく軽く

嘲けるような調子で、しかも優美に上品に扱わなければならない。この詩をひきしめているのは、本物の感情を内包していること、しかもその笑いをそれとなく暗示していることである。グレイは明らかに猫の死を悲しんでいる。召使いの不注意を叱りもした。それにもかかわらず、詩人としては面白おかしく戯曲化し、教訓まで垂れている。<sup>8)</sup>

その冒頭の典型的な詩行を引用してみよう。

'Twas on a lofty vase's side,

Where China's gayest art had dy'd

The agure flowers, that blow;

Demurest of the tabby kind,

The pensive Selima, reclin'd,

Gazed on the lake below.

この詩行には古典派詩歌、ポープ訳の『イリアッド』、ミルトンの『失樂園』、ドライデン訳の『アエネーイス』、ニコラス・ロウの『タマレイン』の王女セリマなどの詩行のパロディが溢れている。<sup>10)</sup> そうして金魚鉢を湖を見おろす花咲く崖に見たて、そこにも思ふ貴婦人たる猫セリマを配したフォンテーヌブロー派風の絵になっている。ハーンは 'agure', 'Demure', 'pensive' の意味を丁寧の説明しながら「社交詩」の特色に説き及んでいる。そして十八世紀的教養に基盤を置きながら、擬英雄詩の自己破壊的な技巧の中から、自然のみずみずしいロマン的感情の横溢が始まったことを学生たちに教えている。明治の始めの強直した定形表現を社交詩を通して、自由な感情表現へと導びきたいという思いが日本での長い作文教育を経験して

ハーンの中に生れていたのである。このグレイの詩がウイリアム・ブレイクの手で一連の美しい挿絵にされて、まず美術によってロマン派運動の中にすくい上げられた。

この諧謔と諷刺は、同じアイルランド人スウィフトのように苛烈さはなくても、ハーンのアイルランド気質にも受け継がれていて、ニューオーリンズの新聞記者時代に次のような愉快な提案をすることになる。一八七九年三月十日の『アイテム』紙に「猫に税をかける (Taxing Cats)」という記事を寄せ、野良猫公害に業をにやして税をかけることを提案したニューヨーク・タイムズの記事を受けてその難しさを数え上げることで逆に猫の魅力を説いている。まず猫の放浪性、「その魔物のような遍在の才能 (a goblin gift of ubiquity)」を上げ、次に違反者(猫)を捕獲し殺害するのに一匹百ドルの出費がかかり、その総額が二千万ドルになること、次に一年に三倍を増えてゆくとして、五年間の予想数をかかげてみせる。統計上の数字のもつ諧謔味はスウィフトのアイルランド貧民のために子供を食糧に供しようという「つましい提案 (A Modest Proposal)」(一九一九)を思わせる。そしてその計算高い女たちを猫が味方に引き入れていて、猫と女たちの共闘の堅固さを語って論を閉じている。<sup>12)</sup> 夜毎に家を脱け出して鳴き交わす猫の騒音に悩む市民のために、ハーンは奇妙な科学器具の考案を思いつく。一八八三年一月十四日の『タイムズ・デモクラット』紙に「猫の研究 (Studies in Cats)」を掲載し、猫に対する科学的適用例を公表している。その前に過去の実験例としてベルギーの科学者によって考案された伝書鳩計画という実験を説明している。心地よい家で満ち足りて過ごさせた後に、

ひどい施設に入れて極度の欠乏状態に置き、もとの家の心地良さを思い知らせた後に解き放つという道徳的教育法である。しかし雄猫 (tom-cat) の夜遊びをやめさせるには、こうした道徳教育は無効であった。そこで次のような科学的方法を思いつく。

A promising move in this direction was the revolving top-rail for back and division fences. This consisted simply of a small and slippery rail, working on well-greased axles and running along the top of all yard fences.

As the visiting cat stepped gingerly on this rail, it did not move; but when, lulled into false security and lifting up his voice to call Maria-a-r! he forgot his care, the treacherous rail would turn and he would fall, stretched out and spitting, into the hospitable watch-dog's jaws.<sup>33</sup>

しかしこの装置も油をさし忘れる人間の怠惰と犬の不足で雄猫の跳染を許すことになって、失敗に終わったのである。あとは電気の方に頼るしかなく、いつか塀の上に電線を張りめぐらし、下男や女中の猫を追いはらう手間ははぶいてやり、「われわれの裏塀が発情の乗物となり、われらの木小屋が赤面することのない日が来ること」<sup>34</sup>を期待していると、この愉快な記事を結んでいる。このようなロマン的想像力と科学的発明の結びつきは、メアリー・シエリーからヴェリエ・ド・リラダンにまでつながる幻想文学の一つの特徴である。

ローマなど温暖なヨーロッパの都市は今日でもそうであるが、当時のニューオリンズの猫公害は相当なものであったらしく、ハーンは、『アイテム』紙に自筆の挿絵と彼の作らしい戯詩を寄せている。

### 猫め

あの猫どものニヤーニヤーギャーギャー ひどい猫め  
 ビンやら靴やらレンガまで投げてもどうなるもんじやない  
 やつらの陰気な鳴き声をびくびくききながら  
 静かな夜をすごすのかよ

どいつもどいつも地獄のようないやな喉声  
 が骨の髄までしみ通るじやないか

まあ猫の皮はさまざま使いようもあるぞ

ひざかけ、しきもの、防寒袋

それに発電機のラバーにもなるぜ

陰気な夜におさらばして

心労のもつれたそでをつくろう

あの眠りをたのしみたいと

たびたびだてを思案もしたさ

あっち行け あっち行け!

あん畜生ども、こころえてやがる

人間様の怒りも怒鳴り声も知らん顔

そこでのんびりニヤーニヤーギャーギャー

真面目に鼠を取ろうともせん

猫なんざあ殺しちまえ

ハーンにはこの外にエミール・ゾラの短篇「私の二匹の猫 (My Two Cats)」の翻訳『アイテム』紙、一八七八年九月二十八日)が

あるし、モーパッサンの猫ピロリやモーツアルトのソナタを好んだというピエール・ロチの猫スーリを読んでいて、ドイツロマン派のホフマンの『牡猫ムルの人生観』につながる十九世紀文学における猫への関心は深い。

アメリカ時代のハーンと猫のかかわりはこうした諧謔とユーモアに満ちたものだけではない。猫はハーンにとって弱者の代名詞であつて、彼の生活のあちこちにさまざまなエピソードをもりばめていく。たとえば小泉一雄の思い出の中で、「ハーンが弱い者虐めが大嫌いであつたのは事実で、テネシーに於る仔猫の眼を潰した男に対する発砲の一事<sup>17</sup>」として書かれているのも、そのうちの一つである。このエピソードは手紙や作品には記録されていないが、ハーン自身が語つたことであつた。

父がテネッシー州に在りし頃、一日路上で一人の男が癩癩紛れに、無心の子猫の眼球を叩き潰して投げ棄てたのを目撃して矢場にポケットから拳銃を出すや件の男に数発を発射したとの話は、知る人ぞ知るでしょう。父は彼様な鬼のような心の男を撃漏した<sup>18</sup>のは一生の痛恨事であると申していたほどです。

眼球をくりぬくというポーの「黒猫」のモチーフを思わせるこの話が事実譚なのか、ハーンの心に育つた夢想なのかかわらないが、ニューヨークでコートニー夫人の食卓に通つていた頃、それに似たエピソードが報告されている。一人の男が庭から水の入つたバケツを持ち出して、ふち石の近くに置き、その中に小さな子猫を浸け始めた。ハーンは恐怖で麻痺したようにそれを凝視し、「その残忍な殺戮者を射つか刺し殺したいという抑えきれない欲望にとらわれた」

この男が門から消えると狂つたように母猫が飛び出して来て、必死に子猫の身体をかき出した。ハーンはむせび泣かんばかりにして舗道に膝をつき、手伝つて、やつと一匹の子猫に「生命のひらめき (a spark of life)」があるのを見、濡れたままコートにたくしこんで、コートニー夫人の家に駆け込んで、そこで養つてもらふことになつた。この猫は灰色の雌猫で、ナニー (Nanny) と名づけられ、賢く、ハーンにずっと愛されたという<sup>19</sup>。

猫はハーンの日常の身辺にあつて、放浪者の彼にとつて家庭の雰囲気の色濃くもつた動物として受け入れられ、小さな美しい愛情の象徴として描かれる。一八八一年四月一日の『アイテム』紙に「猫と犬の物語 (Cat and Dog Stories)」を掲載して、近隣の動物たちのエピソードを語っている。キャンプ街の猫は床下にいる子猫を他の動物に襲われる危険から護ろうと、部屋の中に持ちこもうとして、許されなかつた。そこで母猫は近所の猫を一匹連れて来て交代で子猫を護つたという。また牛乳配達<sup>20</sup>の鳴らすベルの音を聞き分けるといふ聖チャールズ通りの猫の話がある。そうした猫物語の傑作は「小さな赤い小猫 (The Little Red Kitten)」である。大きな耳と燃えるようなエメラルド色の眼をした野性的な子猫が、サーモン色をした気の弱い子猫を護つて、クレオール<sup>21</sup>の貧しい市街に住みついている。

The two always slept together —— the little speckled one resting its head upon the body of its protector; and the red kitten licked its companion every day like a mother washing her baby. Wherever the red kitten went



人は次第にしっぽの長い猫を気味わるいものと思うようになり、その結果として、たまたま、しっぽの長い子猫が生れると、その尾を当世風に短く切斷したのです。——しかし地方によってはしっぽの長い猫ばかりというところがあります。この点、出雲はどうでしょう? 『日本事物誌』の改訂版では、このことについて一文を挿入することを考えています。というのは、初めて日本へ来た人は、誰もが必ず、このことに関して質問を發するからです。

(齊藤正二他訳)

これに対してハーンは八月二十九日の手紙で次のように応えている。猫のしっぽについては早速にもお答えできます。出雲猫(わたくしは最近まで日本の猫は一樣にみな同じだと思っておりました)は一般に生れたときはしっぽが長いのです。しかし当地では、猫は子猫のうちに尾を切斷しておかないと、お化けや猫股になると信じられており、尾の長い猫は夜になると頭に手拭で鉢巻をしめて踊るといふ氣味の悪い話もあります。さらに、女主人に可愛がられ甘やかされた猫どもは、その自分の主人を食べてしまい、それからは、姿、顔だち、声までが犠牲者の女主人にそっくりになるといふ話もあります。もちろん、猫は極楽浄土に入ることができないといふ仏教伝説をあなたはご存じでしょう。猫と蛇だけは仏陀の死にも涙を流さなかつたのです。出雲では、猫は一般に好かれていませんが、伯耆では、出雲より好条件の状況に暮しているように見受けました。猫が一般に好かれない真の理由は、日本式家屋におけるそのいたずらの威力なのです。——畳や唐紙や障子を引き裂き、木工部分を引つ掻き、いくら教えても、食べ物

一番上等の座敷に持ち込んでその畳の上で食べたからです。わたくしは大の猫好きでありまして、アメリカ人の言うように、五十匹以上も「扶養」したことがあるのです。——しかし当地では、猫を飼いたい氣持を満足させることはできなかったのです。こやつが悪戯(いたづら)は手にもあまり、わたくしの飼っている鶯を平らげようと、いつも隙をうかがうという始末でした。

(中略)

いつものことは申しながら、猫のしっぽに関して調べもせずにお話し申し上げ、自分が僭越に過ぎたことがわかりました。人に訊いてわかりましたことは、同一の母猫から生まれた出雲猫であつても、しばしば子猫は尾の長いのもあれば短いのもいるとのことです。このことは当地出雲には二つの異なる種類の猫がいることを示しているでしょう。尾の長い子猫は、可能な限りは常にしっぽという付属器官の大部分を切斷されます。短いしっぽは、そのまま容赦されます。年老いた猫を見ても、その尾が短かいと人々は言うのです。——「この猫は老い込んでいるが、しっぽが短い。だからこれは善良な猫である」と。(と申しますのは、お化け猫は老いると尾が二つに分かれ、そして邪悪な猫はみな長いしっぽをしているからです)わたくしは松江で、最近お盆に悪いほうの猫どもが家々の屋根の上で踊っている姿を見られたという話を聞いています。

チェンバレンの『日本事物誌(Things Japanese)』の「猫」の項を見ると、ハーンがいう「猫股」のことが「一つかいくつかの長い尾をもつた猫がいて狐やかわうそのように人間をだます魔力を持つて

いる」と解説されている。<sup>28</sup> また雄の三毛猫 (tortoise-shell tom-cats) についても日本の迷信を紹介している。<sup>29</sup> また前に拾った猫はとうとう居つかなくなつたと書かれている。チエンバレンも述べているが、猫と魔女の関係はイギリスの伝説にもあつて、読者にも理解しやすいものであろう。<sup>30</sup> ハーンは松江を離れて熊本に移つても、この猫のことを契機に日本における動物信仰への関心を深め、犬神、稲荷、馬頭観音へと考察を広げてゆくことになる。

児童文学における猫はペローやグリムにある「長靴をはいた猫」グリムの「粉屋のおんぼろ小僧とお猫さん」やL・キャロルの『不思議の国のアリス』に登場するチェシャ猫、そしてマザー・グースやエドワード・リアのナンセンス詩の猫たち、キプリング、デ・ラ・メア、ギャリコなど多彩である。<sup>31</sup> ハーンは日本の童話「猫を描いた少年 (The Boy Who Drew Cats)」を一八九八年八月に長谷川弘文堂から出版した。<sup>32</sup> チリメン本の美しい彩色絵本で、絵を描くことが好きな小僧と描いた猫たちが大鼠を退治する古寺の一夜の出来事がきびきびした無駄のない筆致で物語られて、他の三つの彩色絵本と同様に民衆の中で生きた童話の力強さをよく伝えている。

ハーンが日本に来て猫を描いた作品といえば『骨董 (Koto)』に収められた「病的なもの (Pathological)」がすぐれている。その冒頭で次のように猫好きであることを告白している。

Very much do I love cats; and I suppose that I could write a large book about the different cats which I have kept, in various climes and times, on both sides of the world.<sup>33</sup>

大きな猫の本を書くだけの経験をもっているハーンが、その頃身近かにいた「タマ」という猫の病的なふるまいについて書いているが、この猫については小泉一雄がもらわれて来た頃のことを詳しく書いているし、<sup>34</sup> このタマが自分の子を食い殺し、それが原因でハーンの命令で捨てられたことなどが語られている。この作品では、傷つけられたことで死産をしてしまったタマが、ハーン膝の上で眠りながら、夢の中で幻の子猫たちと遊び戯れている姿を美しく描いている。

But she plays with them [her kittens] in dreams and coos to them, and catches for them small shadowy things, — perhaps even brings to them, through some dim window of memory, a sandal of ghostly straw ……<sup>35</sup>

「あるかすかな記憶の窓」とは傷つけられ狂ってしまったタマのわずかに残っている猫の本能的記憶を指している。数えきれない世代を通して加えられ受け継がれてくる遺伝的記憶はハーンの宗教感情の最も深い所にあつて、これはプラトンやエンペドクレスなどギリシアのそれとも結びついて、日本の「祖先崇拜」や大乘仏教理解の出発点となつている。猫の本能的記憶についていくつか例をあげているなかに、「水に溺れた子猫の呼吸作用を回復させる、親猫のあの驚くべき手練」とあるが、先に述べたアメリカ時代の具体的な出来事を指していることは明らかである。

『英文学史』の講義におけるトマス・グレーの有名な猫の詩の他に、ハーンは特別講義「ワーズワス (Wordsworth)」の中で、「小猫と落葉 (The Kitten and Falling Leaves)」を取り上げていて、<sup>36</sup> 詩人としてのワーズワスへのハーンの評価はよく知られるように低

いが、当時の権威的な評価への反動であって、ここではいくつつかの小品を鑑賞している。落葉に戯れる小猫を歌ったこの作品もその一つである。ハーンはワーズワスの特色を「くそ真面目になっても、憂鬱にならない点である」と面白い指摘をしている。原詩は一二八行の作品でその三分の一余りを引用し、こうした小猫の無心な戯れについて、「美と真実への純粹な愛から美しいものを書くべき」詩人の理想を暗示するワーズワスの「くそ真面目ぶり」を好意をもって学生たちに紹介している。そしてこうしたさやかな出来事に率直な喜びを見出す子供のような澁刺さと子猫のような自由潤達さをもつことを学生たちにすすめている。

われわれは卑しく有害な軽蔑すべき些事に思い煩わされるべきではないが、われわれの身のまわりには、幾千もの美しいひそやかなものが存在している。それらさやかなものをうち眺め愛でることができないとすれば確かに大いなる不幸であろう。(池田雅之訳)<sup>99</sup>

ハーンの人生と文学に対する姿勢を表白した文章である。

ハーンはアメリカ時代に書いたボードレール論の中でも、ボードレールの有名な猫を主題にする三つのソネットに言及していないが、E・A・ポアの「黒猫」については、日本の学生たちに「これほどひどく醜い作品はこれまで書かれたことはなかった。それは芸術が芸術でなくなる最低の限界にまで墮している。恐怖感のおかげでわずかに救われている」とその芸術性を低く考えていた。<sup>40</sup>

最後に二十世紀の英文学には、ジェームズ・ジョイスの猫の童話『猫と悪魔 (The Cat and the Devil)』(一九六五)とT・S・エリオットの『おとぼけおじさんの猫行状記 (Old Possum's Book

of Practical Cats)』(一九三九)という二大詩人の猫をテーマにした作品があることを付け加えておこう。また小泉一雄の「父」「八雲」を想ふ」のなかで小動物の殺生に関連させながら、ハーンが長男に無門関の南泉和尚と猫の話語ったという。(恒文社版四八七頁)。

(註) ハーンの著書はタトル版を使用した。それ以外は出版社・出版年を明記する。

(1) 田部隆次「小泉八雲」(『小泉八雲全集別冊』(第一書房、昭和五年)四三—九一四〇頁。ほとんど全文が片仮名で書かれているものを、次男巖の手で漢字に書き直され、所々訂正されて本書の末尾に発表された。二十一通の日本文書簡の最初のものである。

(2) 梶谷泰之「ハーンの日本文書簡——書生としての思い出」、『英語青年』(一九六五年十二月)一四頁。

(3) 田部隆次、前掲書、四四二—三頁。

(4) 大谷正信「個人としての小泉八雲先生」、『帝国文学』一〇巻(一九〇四)、五六頁。

(5) 小泉一雄「父」「八雲」を憶ふ」、『小泉八雲』(恒文社、一九七六年)、三八—九頁。

(6) 内田百閒「ネコロマンチズム」、『クルやお前か』(『内田百閒全集』第九巻)、一八八頁。

(7) 外山正一学長に初年度の講義計画案が提出されているが、その中に「社交詩 (Vers de societe)」が特別講義の一つとして出されている。「社交詩」はハーンが新しい詩の領域として推薦していて、いくつつかの講義録が残されている。それを踏まえた説明であることを知っておく必要がある。

- (8) *A History of English Literature* (The Hokuseido Press, 1965), p. 331.
- (6) *Ibid.*, 329.
- (9) Cf. Roger Lonsdale ed. *The Poems of Gray*, Collins and Goldsmith (Longman, 1969), p. 78—82.
- (11) 土岐恒二「寓意と幻視——グレイの猫からブレインの猫へ」『ユリイカ』第五卷十三号（一九七三年）一七〇—一七三頁。
- (12) *Buying Christmas Toys and Other Essays* (The Hokuseido, Press 1939) pp. 45—48.
- (13) Edward L. Tinker, *Lafcadio Hearn's American Days* (N. Y.: Dodd, Mead & Co., 1924), pp. 206, 208.
- (14) *Ibid.*, p. 208.
- (15) *Ibid.*, p. 207.
- (16) *Ibid.*, p. 204.
- (17) 小泉一雄『父小泉八雲』（小山書店、昭和二十五年）四三頁。
- (18) 小泉一雄「父『八雲』を憶ふ」前掲書、七九頁。
- (19) Tinker, *op. cit.*, p. 203—4.
- (20) *The New Radiance and Other Sketches* (The Hokuseido, Press 1939) pp. 53—4.
- (21) *Facts and Fancies* (The Hokuseido Press, 1929) pp. 89—90.
- (22) *Ibid.*, pp. 91—92.
- (23) 明治二十年鑿刻版。一三〇—一三三頁。
- (24) 明治二十一年鑿刻版。三六—三七頁。
- (25) 小泉節子「思い出の記」『小泉八雲』（恒文社、一九七六）九—一〇頁。
- (26) *Letters from B. H. Chamberlain to Lafcadio Hearn* (The Hokuseido Press, 1936) p. 75.
- (27) *The Writings of Lafcadio Hearn* (Houghton Mifflin, 1922), vol. xv, p. 230. 手紙の文中にきくの猫を飼つたことが報告されてゐるが、これは西インド諸島滞在中のことだつたであろう。毒蛇ヤムカテから身を守るためだつたであろう。 cf. Kazuo Hearn Koizumi, *Re-Echo* (The Caxton Printers, 1957), p. 149.
- (28) *Things Japanese* (Tuttle, 1971) p. 85. 「猫」の項はチエントマンが初版（一八九〇）を再版するに當つて新設した一九項目のうちの一項目である。 *Complete Edition Things Japanese* (Meicho Fukyu Kai, 1985) の解説に於ては楠家重敏「B・H・チエントマン『日本事物誌』の世界」六八頁参照。
- (29) ハーンは「病的なやつ」のはじめで雌の三毛猫として解説をつけてゐる。 Kotto, pp. 219—220.
- (30) cf. Katharine M. Briggs, *A Dictionary of British Folk-Tales*, (Routledge & Kegan Paul, 1970), vol. IV, p. 628, Katharine M. Briggs, *Nine Lives. Cats in Folklore* (1980) (マン・クニンズ訳「猫のフオークローア」誠文堂新光社、一九八三年)
- (31) Cf. George MacBeth & Martin Booth ed. *The Book of Cats* (Penguin, 1976)
- (32) 後に他二三の英語童話と共に *Karma* (Bony Riverlight, 1918) に収録された。
- (33) Kotto, p. 219.
- (34) 小泉一雄「父『八雲』を憶ふ」前掲書、一四〇—一五四—一六頁。
- (35) 同書、五五—一頁。

(36) Kotto, p. 223.

(37) *Interpretation of Literature* (Dodd, Mead & Co. 1915) に収録されている。「子猫と落葉」はワースワスの詩集 *Poem of the Fancy* に収められている。ハーンが「立って詩を書いた人」というように一つの機会詩であろう。一八三〇年作られ、一八三五年に発表された。講義録の引用に不正確なところがあるが筆記した学生のミスであろうか。

(38) *On Poets* (The Hokuseido Press, 1938) p. 498.

(39) *Ibid.*, p. 498.

(40) *A History of English Literature* (The Hokuseido Press, 1970) p. 762.